

平成28年度 教育事業
自然体験活動リーダー養成講座

自然体験活動の指導に必要な知識や技術を、活動を通して学べるように工夫して演習を実施しました。また、自然体験を指導する立場に不可欠な安全管理の手法についても活動を通して学べるように、それぞれの活動でふりかえりを行いました。

1 事業実施までの経緯

本事業は当初、当交流の家で実施する機構のボランティア養成講座と合わせて受講することで自然体験活動指導者リーダー資格を取得できる形で計画をしていたが、諸般の事情によって資格取得のカリキュラムとは関係のない単独講座として実施することとなった。当交流の家で活動している法人ボランティアには例年、「ボランティア・フォローアップセミナー」を開講し、ボランティア養成講座で身に付けた知識・技術を再確認する機会を設けてきた。今年度はその講座が開催されないため、この事業をボランティアのスキルアップの機会とし、かつ法人ボランティアに登録していないが自然体験に興味があり、将来的に青少年と一緒に活動したいと考えている一般の方々にも、自然体験活動に関する技術が習得できるように広く募集をかけた。



2 ねらい

法人ボランティアおよび自然体験活動に関心のある青少年や子育て世代の大人を対象に、自然体験活動に必要な技術や知識の習得を目指して演習と講義を行い、自然体験活動のさらなる推進を図る。

3 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4 後援 大洲市教育委員会

5 期日 平成28年10月1日（土）～2日（日）【1泊2日】

6 場所 国立大洲青少年交流の家

7 参加人数 受講者13名（内訳：社会人4名・大学生4名・高校生5名）

8 講師

眞木 潔 氏（愛媛県キャンプ協会理事長）
ボーイスカウト大洲第1団のみなさん
トラペジウムのみなさん
大谷 裕之 氏（アウトドアインストラクター）
国立大洲青少年交流の家 職員

9 日程・内容

(1) 日程

		11:00	12:00	13:00	15:00	18:00	19:00	20:00	22:30
1 日 (土)	受付	開講式 ・ OR	昼食 ・ 休憩	キャンプのいろは (テント設営)	アウトドア クッキング (野外炊飯)	休憩	星空の 楽しみ方 (天体観測)	就寝準備 ・ 入浴等	就寝

※就寝場所は館内ホールに設営したテントを予定

		6:30	9:00	12:00	13:00	14:00	14:30
2 日 (日)	起床 つどい 朝食	セイフティ・アウトドア (カヌー体験) ※雨天時：クライミング	河原で いもたき (昼食)	移動 ・ 休憩	閉 講 式	解散	

(2) 活動内容

【概要】

当交流の家で活動する法人ボランティアの複数名から要望のあったカヌー体験に加え、野外炊飯やテント泊、星空観察など、当交流の家が企画する親子向け自然体験事業で実施するプログラムを体験できる形で実施した。最初のプログラムでは参加者は自らが宿泊するテントを設営し、テント設営のコツや用具の扱いについて学んだ。野外炊飯では複数の火おこし方法を紹介し、炊飯方法も通常の飯ごう炊きさんではなく少し難易度の高い手法での調理に挑戦してもらった。星空観察では親子向け事業で実施している流れを実際に体験してもらい、カヌー体験では転覆時の対処法やレスキュー方法も交えて演習を行った。また、文化的な体験として大洲における秋の郷土料理である「いもたき」を、カヌー体験後の河原で味わった。

「アイスブレイク」

開講式とオリエンテーションの後、短時間ではあるがアイスブレイクを行った。法人ボランティア同士の参加者以外は初対面であり、後に続く活動をスムーズに進めるためのアイスブレイクである。また、指導を行った交流の家職員は、昨年度まで国立岩手山青少年交流の家で法人ボランティアとして活動していた。当交流の家の法人ボランティアにとっては、これまでの活動で経験したアイスブレイクとは異なった、プロジェクトアドベンチャーの要素を含んだ活動が、非常に新鮮に映ったようである。



演習①「キャンプのいろは」講師：眞木 潔 氏（愛媛県キャンプ協会理事長）

テント設営場所の脇に建つ「まつぼっくり館」にて、キャンプに使用する用具の説明から講義が始まった。眞木氏はアウトドア用品店の店長を務めた経験があり、非常に幅広い知識を持つだけでなく、南極探検のサポートスタッフとして帯同されたこともある程、非常に経験が豊富な方である。講義は眞木氏ご自身の経験も交え、実際に用具を見せながら軽妙な語り口で分かりやすく進められた。後半はテント設営の演習となり、参加者は予め決められたテント班で協力して設営作業を行った。当日は10月初旬とは言え残暑が厳しく、参加者は汗をぬぐいながら作業を進めた。



演習②「アウトドアクッキング」講師：ボーイスカウト大洲第1団のみなさん

今回の野外炊飯は、指導者向けの講習ということで難易度の高い作業に取り組んでもらうとともに、災害発生時に役立つ技術も習得できるような内容とした。最初に、ボーイスカウト大洲第一団の団委員長である小池氏に、ファイヤースチールや電池とスチールウールを組み合わせた火熾し、舞錐式と弓錐式の火熾しを実演していただいた。参加者はくどに薪をセットしたあと、全員が舞錐式の火熾しに挑戦した。一度も経験したことのない参加者は、火種を作るまで随分時間がかかったが、その分達成感は大きかったようである。メニューは野外炊飯の定番であるカレーライスであるが、炊飯方法はアルミ缶を使った「サバイバル飯」に各班一人挑戦してもらい、他の参加者は災害救助用炊飯袋を使った炊飯を行った。



アルミ缶による炊飯は短冊状にした牛乳パックを次々と投入するため、火を絶やさないようにするのが難しかったようであるが、炊き上がりはどれも上々であった。一方で炊飯袋はさほど準備に手間がかからないが、水加減や炊き上がりを見極めるタイミングが難しかったようである。飯ごうなどの炊飯器具を使わない炊飯方法や、水の節約方法など、災害時に役立つ野外炊飯技術を学ぶことができた。

演習③「星空の楽しみ方」講師：トラペジウムのみなさん

野外炊飯後の夜空はあいにく大半が雲で覆われていたが、予定通り自然環境館に移動した。天候の回復を待つ間、シアタールームで天文シュミレーションソフトを使った秋の星空についての講義が行われた。「秋の四辺形」といった秋の星空の特徴が一通り紹介された頃には天候が回復したため、屋上に移動し実際の星空で学んだばかりの知識を確かめた。最後にシアタールームに戻り、星座に関する基本的な知識が講義された。最後に質疑応答の時間が設けられ、好奇心を掻き立てられた参加者からの熱心な質問が続いた。



「簡易スローバッグの作成」講師：大谷 裕之 氏 (アウトドアインストラクター)

消灯までの時間を活用し、翌日の朝に予定されていた簡易スローバッグの作成を行った。この時間はロープワーク講習も兼ねており、「まき結び」と「もやい結び」を覚えてもらい、ペットボトルとPPロープを組み合わせた簡易スローバッグを、参加者各自で作成してもらった。大谷氏から紹介された簡易スローバッグは、家庭で揃う材料で準備でき、手元の輪の大きさを工夫して二次災害を防ぐなど、非常に工夫された使い勝手の良いものであった。次いで翌日に着用するライフジャケットとヘルメットのフィッティングも合わせて行い、安全装備についての確認を行った。



演習④「セイフティ・アウトドア」講師：大谷 裕之 氏 (アウトドアインストラクター)

翌朝は気持ちの良い秋晴れの空が広がり、絶好のカヌー日和となった。この演習は安全管理に重点を置いているが、カヌーに乗るのが初めての参加者もいたため、最初は通常のカヌー研修と同じく用具や操作方法についての確認と水上練習を行った。演習は終始、二人組で安全を確保する「バディシステム」を基本に進められ、参加者はカヌーが転覆した場合の対処方法としてセルフレスキューとペアレスキュー、落

水者を救助する手段としてのスローバッグを使ったレスキューを後半部分で体験した。



(3) 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

*満足：92.3% *やや満足：7.7% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- サバ飯など知らないことがたくさん知れて良かったです。今後、家族での川遊びなどペットボトルとひもを持参して行きたいなと思いました。
- まったく新しい知識はなかったが、今までの復習という意味の活動は、繰り返し行う必要を感じた。
- ボランティア担当の先生から推薦されて参加したこのプログラムだったが、非常に充実していた。
- 実践の時間を増やすために説明を短くして、実践の際アドバイスをもらいながらしたら良いと思った。

(4) 成果と課題

今年度、当交流の家の事業ではいくつか防災をテーマにした企画をしており、この講座においても野外炊飯における「サバイバル飯」などの炊飯方法、電池とスチールウールを組み合わせた火熾し方法などを参加者に学んでもらった。また、一部参加者には屋内でテント泊をしてもらい、避難所でプライバシーを確保する手段としてのテント活用を体験してもらった。今後も、企画事業で災害時に役立つ技術が学べるような工夫を取り入れていきたい。また、この講座の参加者は大洲で活動する法人ボランティアが6名、他施設で活動する法人ボランティアが2名、法人ボランティア資格を取得していない高校生が3名、当交流の家の企画に参加したことのある保護者世代の参加者が2名であった。NEALリーダー養成講座からの変更となり、参加者を法人ボランティアだけでなく一般にも広げたことで、多様な年代から参加いただき、通常の講座以上に活動を通して参加者同士の交流が促進されたように感じる。

一方で、本講座の募集人数30名に対して参加者が13名に止まった。企画が遅れ、広報が予定よりも大幅に遅れたことが一つの要因であるが、自然体験活動の指導者養成が本題でありながら、自然体験活動の初心者向けの側面を持ってしまい、テーマがぶれて広報先が絞り切れなかったことも大きな要因と考える。次年度は法人ボランティア養成講座と組み合わせたNEALリーダー養成講座としての実施となるため、今回の反省を生かした計画的で効果的な広報を心掛けたい。

(担当：企画指導専門職 来田 淳)